

都道府県別賞一等

おばあちゃんのもしもと私の未来

茨城県 筑西市立下館中学校 二年生

戸村 暦花

夏休みの朝、母の電話が鳴りました。母が電話口でうなずいたあと、心配そうな顔でこちらを見ました。「おばあちゃんが駅で倒れたって……今、病院に運ばれてる。」その言葉を聞いた私は信じられませんでした。前の日も元気に買い物に行っていたのに。

すぐに家族みんなで病院に向かいました。幸い、大きな病気ではなく、軽い熱中症でした。でも、先生からは「高齢なので、今後の体調管理には注意が必要です。」と言われました。

その日の帰り道、母がぼつりと言いました。「こういうとき、本当に保険ってありがたいね。おばあちゃん、きちんと備えてくれてたから、病院代の心配はなかったよ。」

私は少し驚きました。保険というと、火事や交通事故のときの話だと思っていたし、私にはあまり関係ないものだと思っていたからです。でも、こんなふうにな身近な人が倒れたときにも役に立つものだと知り、保険のイメージが変わりました。

その日の夜、おばあちゃんのお見舞いに行ったとき、私は思い切って聞いてみました。「おばあちゃん、なんで保険に入ってたの？」おばあちゃんは優しい笑顔でこう言いました。「昔、おじいちゃんが病気になって入院したことがあったの。そのときに保険に助けられたのよ。だから私も、年をとった今でももしもに備えているの。」

「もしもに備える。」その言葉が私の心に強く残りました。

家に帰ってから、私は家族に聞いてみました。「うちも保険に入ってるの？」父がうなずいて答えました。「医療保険や生命保険、それに年金保険も少しずつ準備しているよ。万が一のときに困らないようにね。」

私は思いました。保険は目に見えないけれど、家族を守ってくれている盾のような存在だったんだと。

今の私は、まだ保険に入る立場ではありません。でも、これから大人になって仕事をして、家族をもつようになったときには、私もその盾を持っていたいと思います。

そして、保険はお金の支えだけでなく、心の支えにもなるのだと気づきました。おばあちゃんが安心して治療が受けられたのも、私たち家族が落ち着いて行動

第63回中学生作文コンクール

できたのも、「大丈夫」という気持ちがあったからです。

これからは「人生百年時代」と言われています。長生きすることは嬉しいことだけれど、病気や介護、お金のことなど、さまざまな備えが必要になると思います。そんな未来に向けて、私はおばあちゃんのようにしっかりと、もしもに備えられる人になりたいです。

保険はただの契約でなく身の回りの人への思いやりであり、未来への優しさであるものです。

今回の出来事を通して私は、「安心して暮らす」ということの大切さを改めて知りました。これからも、自分と大切な人たちを守るために、しっかりと考えて行動できる自分になりたいと思います。